

佛敎研究

第五卷 第三、四號合併

三經釋と選擇集との對檢

大須賀秀道

一

法然上人は日本淨土敎の創建者であつて、その門下に群賢雲の如く集り、幾多の異流を派生したけれど、上人の著述は選擇集を除いて他に見るべきものが尠い。法然上人全集には、さまざまの法語や消息の外に、淨土宗略要文、往生要集略料簡、同詮要等の數部が輯録せられてゐるけれど、一般には其書目さへ知られてゐない程で、昔からこれを講解せるものも至つて稀れである。

たゞ多少注目せられてゐるのは、漢語燈錄の首に録載せられてゐる三經釋である。支那已來、天台や賢者が一宗を創立するには、正依の經典についてその敎學を開顯するのを例としてゐるから、法然上人にあつても、是非三經の解説によつて、その新たな佛敎觀の發表が試みられねばならぬ筈であつた。さればこの三經釋こそ上人が創案せる一代敎學の發現であつたとも見られ得るのであら

うし、その内容について比較しても、先づ量において選擇集よりは三經釋の方が二倍に近い紙數であるのみならず、その中には選擇集には見られない重要な批判が現れてゐる。それゆゑ法然上人の教學を知らうとするに、更に三經釋に研究の注意が拂はれてよいことと思ふ。

二

然るに三經釋の内容は、其大部分に於て殆ど選擇集と一致してゐる。これは後に詳説するであらうけれど、こゝに先づその特異點の主要なものを擧げて、その研究の價值に富めることを示さうならば、

一、先づ大經釋の卷頭に出せる大經の大意釋、これは選擇集に見られないもので、その釋迦彌陀二尊の悲懷とせる趣旨は、親鸞聖人の教行信證に出せる大意釋と一致してゐる。而もこれを是則諸佛出淨土出穢土御本意也と、出世本懷に約せるは、法然上人として注意に價する。

二、次に立教開宗といふ語を標して、先づ諸宗の立教不同を擧げ、これに對して道綽によれる聖淨二門を出せるばかりでなく、更に横截五惡趣の文を以て二門を分別して、

天台眞言皆雖名頓教斷惑故猶是漸教也、未斷惑出過三界之長迷故以此教爲頓中頓也。

と、臆面もなく天台眞言の名を掲げ之に對して、漸頓の批判を與へてゐるが、これも選擇集では餘程諸宗に遠慮してゐられたものが、この様な鋒鋒は露はれてゐない。

三、三十五女人往生願の意を説くを、これも法然の宗教の特色であつて、傳記の上にもいつもこれが異彩を放つてゐる。それが選擇集には出てゐないけれど、大經釋には特にそれが高調せられてゐる。四、善導の專雜二修の義を補助するに、智榮、信仲、感師、天竺覺親、源信、珍海等の釋文を以てせられてゐる。この中智榮信仲覺親が如何な人か其道迹更に知られてゐないけれど、親鸞の銘文に智榮が善導の別德を讀せる文が引釋せられてあれば、是も法然から傳へたものであつたことが確か得られる。是れまた選擇集には見られない引證である。

五、廢立、助正、傍正の三義が、但念佛助念佛但諸行の三義とせられてゐるは、誰も知れる如くである。

六、觀經釋の首に大、觀二經の前後が論せられてゐるのも、他に見るを得ない所で、而もこれが廬山寺本選擇集には、一度草案として書かれたが後から抹殺せられてゐる所は注意に價する。

其他仔細にこれを掲ぐれば際限もないことであるが、斯く三經釋に多くの特異點があるとすれば、法然一代の教學を知るには、選擇集と俱に更に此書について、細心の研究を要することゝなるのである。

三

然るに從來研究せらるべくして、研究せられずにゐたのは三經釋である。既に選擇集の講説には

古今の龍象おの／＼全力を傾注して、註解の典籍汗牛充棟も管ならぬ程であるのに、遺憾にもこの三經釋は毫も顧みられなかつたのは何故であらうか。それには種々の事情もあつたに相違ないけれど、今茲に予が考察せる主要な點を擧ぐるならば、

(1)、その内容が殆ど選擇集と一致してゐれば、既に選擇集を講ずれば、三經釋を講ずるの必要はない。

(2)、選擇集はその傳來が明確であるけれど、三經釋はその成立に疑端の挾まれる餘地のあること。

(3)、三經釋には承應三年刊行の私記本と正徳五年義山校刻漢語燈錄本とがある、其他に惠空師寫傳の古本あつて、文字の出沒一定せず、適從に迷ふこと。

是等の事情があつて、その内容の取るべきものあるにかゝはらず、これに對する學者の信用と尊重を缺いてゐることは、淨土敎研究にとつて遺憾といはざるを得ない。爲めに近來三經釋の本文に就て異本の對校に學者が相當の努力を拂ひ、語燈の編者望西樓の選擇大綱抄、大經抄や又は良忠の選擇決疑抄、寂惠の淨土述聞抄等に引用せる所、概ね私記本に一致せるを以て、現行の漢語燈錄本は義山師が縱横に刪補損益せられたものであらうといふことが殆ど世の定評となつた。いかにも私記本の行文質朴にして和様を脱せざる所、原形に近きものであることが認め得られる。

されば今私記四本の三經釋を以て、これを選択集に對檢するに、そこに尙ほ疑惑の解き難きものがある、何となれば三經釋は惠空本觀經釋の卷尾に、

文治六年庚戌二月二日於東大寺講之畢所請源空上人能請重賢上人
と記され、義山本小經釋卷尾にも

本云文治六年二月一日於東大寺講之畢所請源空上人能請重賢上人

と記されてゐて、些の相異はあるけれど、文治六年東大寺にて三經講說の時の筆記であるといふ所傳に至つては一致してゐる。

然るに選擇集の成立年代には異說があつて、其中元久二年說もまた根據のあることなれど、今假にそれよりも前なる建久九年說に従ふことゝしても、文治六年はそれより九年前に當るゆゑ、三經釋は選擇集の成立以前に既に編輯されてゐたものと看做されなくてはならない。既に三經釋の編輯が選擇集の成立以前にあつて而も其内容及び文章に殆ど一致せる點が多いとすれば、少くも選擇集書のかれた時には、三經釋が參考に供せられてゐたばかりか、その文章の或部分は三經釋を底本として筆錄せられたものであつたらうとも想像せられ得ることとなる。

勿論選擇集は法然上人が親ら執筆せられたものでない、證空感西等の弟子達が編纂せるものと傳へられてゐるが、それは法然上人の説く所を直接に速記したものであつたらうか、又は既に記錄

せるものがあつてそれを資料として聖人から授けられた立案の下に編纂せられたものであつたらうか、それらのことは未だ學者の研究したことを聴かないけれど、既に廣本選擇集が別に存在したとも考へられてゐたゆゑ、恐らく何等かの參考資料あつてそれを底本として編纂せられたもの、様に想像せられる若しも斯く想定し得られるものとしたら、三經釋と選擇集との關係に於て、既に時代に於て後者は前者よりも後に成立せることが明瞭であるから、少くもその内容に一致せる點の多き限りは、選擇集の編纂には三經釋がその參考資料となつてゐたのであつて、たゞ／＼兩者の文章の一致せるものあるは、それを其儘に寫録したものであつたと推定せられるのが當然である。

四

斯る豫想の下に、集と釋との文章を一々に比較して其異同を検すると、其中に兩者の文章の殆ど一字一句も相異せない個處も随分多く見出される。今煩はしけれど左に之を點檢する時は

(1) 私記本大經釋_{四丁} 又大阿彌陀經云より_{七丁}の次難易義者念佛易修諸難修に至るまで四枚餘は全

く本願章の私釋と同文であつて、僅に其屋舎の三字出沒せるのみである。

(2) 同_{廿一}私云就此文有_三意_{より}_{廿三}の本願義至_下應辨に至るまで、其中僅に_{廿一}の等の字の釋七行を除けば、全く二行章の私釋の其儘である。

(3) 同_{廿三}次雜行者即文より_{廿九}豈非快哉應知_{まで}、五番相對の一々に翻親謂是者といふ如き文字を

加へ、又純雜の例の下に八藏四含二十韃度等おの／＼其數目を列記せる相違等あれど、大略は二行章私釋と一致してゐる。

(4) 同_{丁右}^{四十四} 往生禮讚釋日より_{丁右}^{四十六} 可通正像末に至るまでは獨留章の私釋と同じである。

(5) 私記本觀經釋_{丁左}^{三十八} 從若念佛者下至生諸佛家より_{丁左}^{四十二} 卽是其終益也_上までは、全く絶對雜善章の引文及び私釋と符合してゐる。

(6) 同_{丁左}^{四十三} 所引三心者は行者至要より_{丁左}^{四十四} の能用心敢勿令忽緒までは全く三心章私釋の文であつて僅に二三字相異してゐる。

(7) 同小經釋_左^三 不可以小善根福德因緣より_右^四 念佛是勝善根までは、全く多善根章私釋の文である。

又_{丁右}^{十一} 問曰何故六方諸佛より_{丁右}^{十三} の卽得延年轉壽までは、證誠章私釋と護念章私釋との其儘である。
(8) 同_{丁左}^{十九} 凡案三經意諸行之中より_{丁右}^{廿三} 如佛經_上までもまた付屬章私釋の文である。

斯くの如く三經釋には選擇集に出てゐる文章の其儘が一部の始終多量に見出されることであつて、此外に三輩章私釋の廢助傍の三義も、攝取章私釋の本願非本願の對釋も悉く記されてある。それゆゑ若し三經釋成立の時代が前にあるならば、選擇集は其中から要點を摘抄したものと看做さなくてはならない。

實際に選擇集の内容は、敎相二行の二章を除けば、後の十二章に三經中の要文を引いて、これに

私釋を附してゐるから、全く法然上人の三經觀である。三經釋もまた其が三經の隨文作釋であるとはいへ、實際は三經の要文に就て一々に批判を與へたものに過ぎない。されば兩書の内容の類似せることは自然の歸結ではあるけれど、これを思想發展の過程より見れば、先づ三經研究の成果たる隨文作釋の三經釋が前に成りて、教義批判の選擇集の後に出づるのが順序である。だから選擇集の編輯に際し前より記録せられてゐた三經釋が参考せられ、其中から文章を抄出したと見れば、いかに兩者の間に類似の文があつても、別に議論はないのである。

五

されど此釋前集後の見解を裏切るのが廬山寺本選擇集である。該本が選擇集編輯當時の草稿本であることは、既に學者の一致して認める所であるが、その草案の際に、前に記せる如く三經釋の中から處々の成文を抄出したものであつたとすれば、草稿本もまた初めから成文となつてゐて、新に文章の添削や改竄を要せぬ筈ある。然るに廬山寺本を検すれば、初めから淨書せられてゐる箇所もあるけれど、また文章の刪補推敲に苦心せる迹が歴々して認められる箇所も多い。今その添削改竄せられた文章の例を左に出す時は（引文中の□は抹消、（ ）は改竄、〔 〕は添補の符號）

(1) 二行章純雜の例の下にて廬山寺本では山家佛法血脉譜云一〔云一胎藏界曼陀羅血脉譜一首二胎藏金剛兩〔界〕曼陀羅血脉譜〕一首三雜曼陀羅血脉譜一首と苦勞して書かれてゐるのが、大經釋では既

に成文となつてゐる

(2) 三輩章廢助傍三義の下に於て、廬山寺本では答曰此有三意一〔爲〕廢〔於〕諸行歸於念佛〔而〕說諸行也二〔爲〕助成念佛〔而〕說此諸行也三〔爲〕約念佛諸行二門各〔爲〕立三品〔而〕說此諸行也一〔爲〕廢〔於〕諸行歸於念佛〔而〕說諸行者とあつて、初は簡單に答曰此有三意一廢諸行歸於念佛二爲助成念佛而說此諸行三約念佛諸行二門各立三品也と書いたのを、完全な文章にするため添削を加へ、於の字や爲の字の遣ひ方に迷うてゐることであるが、大經釋_{丁廿五右}では既にそれが選擇集通りの成文となつてゐるから、選擇集の前に三經釋の成立してゐたものとは考へ得られない。

(3) 約對難善章の下で、廬山寺本では言人中最勝人者是待最勝而所褒也の褒の字が憶ひ出されず、初は廩と書き、次に廢と書いて苦み、更に其下へ念佛功德秀諸善上非芥陀利式〔用〕巨呈者也の十七字を書いてみたが悉く之を抹削し、更に問曰既以念佛……警意應知の長い文章を外の紙へ書いて添加した、それが失はれて今は缺けてゐることであつて、こゝでそれ程に苦心してゐる。それが觀經釋_{丁三十九左}では選擇集の現文と同じ成文となつてゐて、たゞ廢の誤字が踏襲されてゐる。こゝらは誤字までも選擇集から來てゐるのが面白い。

其他檢し來れば更に多く斯様な例が數へられることであるけれど、今は其煩を避けることゝするが是等はさう考へたとして、選擇集より前に三經釋が成立してゐたものとは認められない。然るにそ

れが全く同じ文章であるとしたら、これは選擇集が三經釋を抄録せるものではなうて、却つて三經釋の方が選擇集を抄録せるものと看做さねばならぬことゝなるのである。

勿論三經釋には、其以外の文章も多量に含まれ、重要な義も現れてゐないではないけれど、その一部の骨目は上に掲げた選擇集と同じ文章の上にあるのであつて、それが全く選擇集から寫し取られたものであるとすれば、三經釋の成立には頗る疑を挾まなくてはならない。世間では私記本、惠空本と義山本とを比較して、文字の異動を彼此と論じてゐるけれど、それは既に末の話である。茲に予の見る所は遺憾ではあるが、縱令義山師の手が入れられないとしても、此三經釋については更に根本的に其成立の史實を疑はざるを得ないのである。

六

されど果して三經釋が選擇集を素材としてゐるか否かは細密に研究されねばならない。今その最も明かな痕迹と認むべきものを摘發したならば、大經釋_{丁三}に

故以念佛爲正定之業本願義至下應辨

とあるが、それは二行章私釋の文である。然るに二行章では次に本願章が出て來るゆゑ本願義至下應辨でよいけれど、大經釋では既に上に本願章の私釋を出して解説したから、本願義如上既辨とでも書かねばならぬ所である。但し無理に通れば後に本願の義も出てゐるゆゑ通れぬこともない

のであらうか、義山本も此の通りになつてゐる。また觀經釋_{三十九}にも

答曰豈前不念佛之行廣_{九品}卽前所引往生要集云隨其勝劣應分_{九品}是也

とあるけれど、選擇集では上の三輩章私釋に

故往生要集云問念佛之行於_{九品}是何品攝答若如說行理當上々如是隨其勝劣應分_{九品}

の文が出てゐるからこれでよい。然るに大經釋では前に其文が省かれてゐる。それなのに集と同じく豈前不云と書いたのは、辻褄の合はぬことゝなる。又觀經釋_{四十}に

今依此文廢孝養等廉行可歸念佛云云

とあるが、此前に約對雜善章の私釋を全體舉げつゝ唯最後の當知念佛有如此等現當二世始終兩益應知の文字を削つて、それに代へるに此文章を以てしたのであるが、今依此文とは何れの文であるのか、恐らく是人名芬陀利華の經文であらうけれどその指す所が餘り遠くて不明であるし、文章として前後の接續を失うてゐる。而して此前の_{三十九}に私問曰とあるのも、又大經釋_{廿一}に私云とあるのも、選擇集に於ける私釋段の形式であつて、これを三經釋の中に置く時は、前後甚だ不調和の感を免れない。

斯の如く檢覈し來れば、三經釋が選擇集を編輯資料として其中の文章を抄引せる迹は歷々と見られる事であつて、後者が前者よりも根本的なものであることは動かされないことゝなる。殊に一部

の組織から見ても、選擇集の十六章段は一定の體系の下に秩序正しく排列せられて、一絲紊れざるものがあるけれど、三經釋に至つては、經文の次第を逐うてはゐるものゝ、其内容に至つては殆ど支離滅裂の感があつて、前後一貫せる生命の脈動が缺けてゐる。殊に最後に出せる三經に互れる七選擇の如き、又總結の夫速欲離生死云々の要文の如き、之を選擇集においてこそ一篇に於ける最後の斷案として、これを題號や教相二行の二章等に照應せしめて、掉尾の感があるけれど、三經釋としてはそこに其程の生命が動いてゐない。謂はゞ選擇集のためには必ず創作せられねばならぬ文字であるけれど、これが三經釋の爲に特に案出せられたものとは如何にしても考へ得られない。だから三經釋の編輯は恐らく選擇集を素材とせしものであらうとの推定は、愈々肯定せられねばならぬことゝなる。

七

前に記せる如く三經釋は其奥書に依れば文治六年東大寺に於ける講演の筆録である。故に本文にあつても大經釋三十三に、但念佛助念佛但諸行の三意の下にて

聽聞人々各任セテ御心ニ可令修行給但導師但意者依善導

と、法然上人自ら導師と稱せられてゐる。これは選擇集では、

但此等三義殿最叵知請諸學者取捨在心レ今若依善導ヲ以初爲正耳

とある所で、三經釋は聽講記の體に改變せられてゐる。其他同_{丁左}四十二に

若能念佛_{セハ}遂_ハ往生極樂_ト曰事_ク此中聽聞集來人云々

と記し_{丁左}四十三に今時聽聞諸衆といひ、觀經釋_{丁右}二十に

今聽聞諸衆中眞實厭離穢土御志御眞實欣求淨土御志御自_{サハ}今日

といひ、同_{丁右}二十四に

今聽聞人々御中或在_ニ法相宗人或在_ニ三論宗人

といふ如く、殊に講演の體に書かれてゐるが、前後の文章は比較的に成熟せる漢文であり、中には洗鍊せられた辭句の見出さるゝに係らず、此の講演體の所のみが、いかにも前後と不調和な日本語の未熟な漢文に書かれてゐるのも、奇怪に感せずにはゐられぬ點である。惠空本小經釋終（古本漢語燈錄_{二五}）には

抑雙卷無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、淨土三部妙典自開白之朝至結願夕三ケ日之間一一文句細々雖_レ不_レ消釋_{二云云}

と三日間講讀の趣旨が詳かに開陳せられてゐる。

然るに此の東大寺講演の事、拾遺古德傳四卷にも出てゐて、俊乘房入唐歸朝の時、淨土五祖の眞影を將來し、それを東大寺半作の檐下にかけて、供養の筵を設けた時に、上人を導師として興福東大

兩寺の學生の前で講說せられたやうに記されてゐる。然るに重源の入唐は、釋書等によれば仁安二年であつて明年秋歸朝せられたのであるゆゑ、史實に於て二十年以上も時代の相異がある。併し此の講演は彼の大原問答と同じく、各宗學者の前で花々しき公開の信仰發表であるゆゑ、後の時代に於てその内容の潤色せられたといふことも、想像し得られないこともない。さればこの講演その物も史實として幾何の根據をもつてゐるかといふことは、更に考證せられなくてはならない。

法然上人の三部經釋、即ち三經講說の筆記と看做されるものが此他に多く傳へられてゐる。和語燈錄に出づるものは簡潔な和文で稍古色を存してゐる。西方指南鈔にも「法然上人御說法事」の中に、また三經の講說筆記の文が收められてゐて、これは親鸞の眞蹟が傳へられてゐて、その自ら集録せるものと看做されてゐるから、恐らく更に原始的のものであらう。捨遺古德傳に出づるものは、その内容に於て稍々此三經釋に近い點が看取せられる。勿論法然上人は幾度か三經を講說せられたに相違ないが、恐らくそれは文々句々に互らぬ大意釋であつたに相違ない。

八

已上考證し來れる所にて、予は三經釋の成立を選擇集よりも遙か後の時代に置かねばならぬことゝなつた。されど予はこれによつて三經釋の價值を全く抹殺せやうとするものではない。何となればそれが既に望西樓や良忠の著述に引用せられてゐるとすれば、古くから存在せることも明かであ

るし、又何れの時代に何人の手によつて記されたるものなるに拘らずその内容には前にも記した如く、選擇集の内容の外に、淨土の教義上幾多の注意せらるべき要義が收められてゐる。これが三經釋の特異點であるとするれば、これが研究は決して從來のやうに等閑に附せらるべきでない。

而して選擇集の内容以外の文章に就ても、予が自由の想像を容されるなれば、他に何等かの資料が存したではあるまいか。尤も廬山寺本で見れば選擇集の編輯だとして、皆が皆まで即席に案出せられた文章とは思はれず、何等かの草稿から筆録したものゝ様に見られるが、三經釋の編輯にも、選擇集以外に必ず何等かの資料があつて、それは原始的のものであつたにも相違ない。即ち大觀二經說時の前後の如き、これが選擇集稿本では一度記して抹殺せられてゐるが、觀經釋にはそれが載せられてゐる。又大經釋^{十丁}右左に

當知一一願不可虛設故上所引往生禮讚云彼佛今現在世成佛云

とある上所引の文字の如き、いかにそれから上の文を讀んでみたとしても、往生禮讚は引用せられてゐないのである。故に義山本では此の上所引の三字を削つて故の字に改めてゐる。斯く私記本三經釋に據り、その文章を仔細に點檢すれば、何やら疑はしいものとなつて、其價值を損することゝなる。されど一編の前後を觀れば、全くの僞作ではないことは明かであつて、若し其中に何等か原始的資料に根據を有するものがあるとするれば、沙の中に黄金の混せるやうに、その尊重せらるべきは勿論である。